

佳作

特攻平和会館へ行って

鹿児島県 鹿児島市立広木小学校六年 末吉 結衣

私は夏休みに家族で知覧の特攻平和会館に行った。毎年、八月になると広島や長崎に落とされた原爆や戦争の様子をテレビで目にする。私はそのテレビで特攻隊という人達のことを知った。なぜ、若い男の人達が日本のために命をささげないといけないのか、出げき前大事な家族や好きな人を残していい気持ちにはどんな思いだったのかなどを知りたいと思います、知覧特攻平和会館行きを家族に提案した。

ちゅう車場から平和会館に入るまでに、特攻勇士の像や陸軍戦とう機などがあつた。周りには、グラウンドや体育館があつたり緑があつたのでふつうのいなかの風景だと感じた。

でも、平和会館の中に入ると、すぐ目に戦争の映像とこわれた戦とう機がとびこんできた。それを見て私は少しこわくなった。さらに中に入ると特攻隊

ないのだろう。戦争をしてなんの意味があるのだろう」と思わずにはいられない。戦争をしたら人の命がたくさんうばわれてしまう。今もまだウクライナとロシアが戦争をしている。イスラエルもまだ戦争をしている。そこでもたくさんの命がうばわれ苦しんでいる人達がいる。話し合いや他の方法で解決できないのだろうかとニュースがでるたび私は思う。今、日本は平和だ。それは、戦争のうえに成り立っているかもしれない。しかし、誰も私欲のために戦わないでほしい。そしたら世界は、もっともつと幸あふれるものになっているにちがいない。戦時下の子ども達に「水」や「食料」があること以外の感動を私は届けたい。

員が家族や友人にあてて書いた遺書や手紙が展示されていた。私はそれを読んでいった。たくさん展示されていたのでぜんぶ読むことはできなかった。家族や兄弟、好きな人へ書いた手紙などがあつた。その中でも「お母さん、ありがとうございます。さようなら、お元気で」というようなお父さんよりもお母さんにあてて書いた手紙が多かつたように思う。また、私が読んだ手紙の中に「行きたくない。死にたくない。帰りたい」という言葉が書かれていないにはおどろいた。てきの船に体当たりして自分も死ぬのが分かつているのにだ。私だつたらたえられずに、逃げて帰ると思う。知覧から沖縄まで向かう戦とう機の中でみんな何を思つていたのだろうか。青年達は、日本が勝つのを信じて命をかけて戦つたが、日本は負けてしまった。大切な息子を失い、日本は負けてしまい家族はどんな思いだつたのだろうかと思う。特攻隊は必要だつたのだろうかと考えてしまった。

私は、この知覧特攻平和会館に行つてみて、戦争で亡くなつた人達もいるし、痛い思いもして、まだ今も頭の中に戦争の思いが残っている人もたくさんいることを知つた。私は「なぜ戦争をしないといけ